

「障害」について考える

片寄 光彩

私は夏休みに絵画の展覧会に行きました。すると、小学生くらいの女の子と女の子のお父さんの会話が聞こえてきました。

「これでも、高校生が描いたんやって。」

「そうやなあ。いまいちやなあ。」

私も近くで、同じ学校の絵を見ていました。並んだ絵画の上には「特別支援学校」と書かれた紙が貼ってありました。「特別支援学校」とは「心身に障害がある児童や生徒が通う学校」だそうです。私の近くで話していた親子は障害者が描いた絵を見て言っていたのです。

「特別支援学校で描かれた絵」というのを理解していたのかは分かりませんが、私も一年前までは同じ気持ちで、目にも留めず通り過ぎていたと思います。

私は今年の夏から半年間、入院をしていました。その時、生まれて初めて「障害者」と呼ばれる人とお話をしました。中学二年生のお姉さんで、癌のため右足を切断したそうです。お姉さんは、いつも笑顔で看護師さんと一緒にリハビリを頑張っていました。一歩ずつ、ゆっくりと足を踏ん張って歩いている姿に「しんどい思いをしているのは自分だけ」と後ろを向いていた私も、すごく勇気づけられました。

そのお姉さんは、今もまだ病院にいます。オンラインを通し、特別支援学校の授業を受けながら辛い治療と毎日戦っています。

私の入院生活は、とても辛くて、しんどい事ばかりでした。しかし、過去の自分と大きく変わった事があります。それは「障害や病気を持っている人の立場になって考える」という事です。

展覧会に行った時、入院を経験した後の今の私は「特別支援学校」のみんなが描いた絵をじっと見つめていました。特別支援学校の生徒たちが描いた絵の前を通り過ぎていく人たちの会話を聞いて、胸がじわじわ熱くなっている自分がいました。

その一枚一枚の絵は、よく見ると私たちに何を伝えているのかが分かります。「幸せ」や「楽しさ」、「喜び」をお花畑や自分の自画像などで表現しています。

その中で一枚、気になった絵がありました。中学二年生の男の子が描いた絵です。真っ青な空の下、赤いスニーカーが芝生の上にきれいに並べて描かれていました。私はすぐさま、病院で出会ったお姉さんの事を思い出しました。その男の子は「早く思いっきり走りたい！」という気持ちを絵を通して私たちに伝えているのだと思いました。

私は「障害者」を「障害を持っている人」という一言でまとめてしまっただけだと思いません。「障害者」は、私たちより何倍も努力し続けています。あたえられた命を大切にするために。生きるために。

「障害」というものは、私たちに突然やってくるものでもあります。病気や事故で、体が不自由になる事もあるかもしれません。

突然、大好きだったスポーツができなくなったらあなたはどうしますか？突然、大好きな

家族の顔さえも見られなくなったらあなたはどうしますか？

私は皆さんに一度「障害」について真剣に考えて頂きたいです。どんな人たちも、分けへだてなく生きていく事のできる、明るい日本の社会を目指して！